交尾

梶井基次郎

その一

星空を見上げると、音もしないで何匹も蝙蝠（こうもり）が飛んでいる。その姿は見えないが、瞬間瞬間光を消す星の工合から、気味の悪い畜類の飛んでいるのが感じられるのである。

人びとは寐（ね）静まっている。――私の立っているのは、半ば朽ちかけた、家の物干し場だ。ここからは家の裏横手の露路を見通すことが出来る。近所は、港に舫（もや）った無数の廻船（かいせん）のように、ただぎっしりと建て詰（こ）んだ家

の、同じように朽ちかけた物干しばかりである。私はかつて独逸（ドイツ）のペッヒシュタインという画家の「市に嘆けるクリスト」という画の刷り物を見たことがあるが、それは巨大な工場地帯の裏地のようなところで跪（ひざまず）いて祈っているキリストの絵像であった。その連想から、私は自分の今出ている物干しがなんとなくそうしたゲッセマネのような気がしないでもない。しかし私はキリストではない。夜中になって来ると病気の私の身体（からだ）は火照（ほて）り出し、そして眼が冴（さ）える。ただ妄想（もうそう）という怪獣の餌食（えじき）となりたくないためばかりに、私はここへ逃げ出して来て、少々身体には毒な夜露に打たれる

のである。
どの家も寐静まっている。時どき力のない咳の音が洩れて来る。昼間の知識から、私はそれが露路に住む魚屋の咳であることを聞きわける。この男はもう商売も辛いらしい。二階に間借りをしている男が、一度医者に見てもらえというのにどうしても聴かない。この咳はそんな咳じゃないと云って隠そうとする。二階の男がそれを近所へ触れて歩く。——家賃を払う家が少なくて、医者の払いが皆目集まらないというこの町では、肺病は陰忍な戦いである。突然に葬儀自動車が来る。誰もが死んだという当人のいつものように働いて

いた姿をまだ新しい記情のなかに呼び起す。床についていた間というのは、だからいくらもないのである。実際こんな生活では誰でもがみずから絶望し、みずから死ななければならないのだろう。

　魚屋が咳(せ)いている。可哀(かわい)そうだなあと思う。ついでに、私の咳がやはりこんな風に聞こえるのだろうかと、私の分として聴いて見る。

　先ほどから露路の上には盛んに白いものが往来している。これはこの露路だけとは云わない。表通りも夜更(よふ)けになるとこの通りである。これは猫だ。私はなぜこの町では猫がこんなに我物顔に道を歩くのか考え

て見たことがある。それによると第一この町には犬がほとんどいないのである。犬を飼うのはもう少し余裕のある住宅である。その代り通りの家では商品を鼠（ねずみ）にやられないために大低猫を飼っている。犬がいなくて猫が多いのだから自然往来は猫が歩く。しかし、なんといっても、これは図々しい不思議な気のする深夜の風景にはちがいない。彼らはブールヴァールを歩く貴婦人のように悠々（ゆうゆう）と歩く。また市役所の測量工夫のように辻（つじ）から辻へ走ってゆくのである。

隣の物干しの暗い隅（すみ）でガサガサという音が聞こえる。セキセイだ。小鳥が流行（はや）った時分にはこの町では

怪我人(けがにん)まで出した。「一体誰がはじめにそんなものを欲しいと云い出したんだ」と人びとが思う時分には、尾羽打ち枯らしたいろいろな鳥が雀(すずめ)に混って餌(えさ)を漁(あさ)りに来た。もうそれも来なくなった。そして隣りの物干しの隅には煤(すす)で黒くなった数匹のセキセイが生き残っているのである。昼間は誰もそれに注意を払おうともしない。ただ夜中になって変てこな物音をたてる生物になってしまったのである。

　この時私は不意に驚ろいた。先ほどから露路をあちらへ行ったりこりこちらへ来たり、二匹の白猫が盛んに追っかけあいをしていたのであるが、この時ちょう

ど私の眼の下で、不意に彼らは小さな唸（うな）り声をあげて組打ちをはじめたのである。組打ちと云ってもそれは立って組打ちをしているのではない。寝転（ねころ）んで組打ちをしているのである。私は猫の交尾を見たことがあるがそれはこんなものではない。また仔猫（こねこ）同志がよくこんなにしてふざけているがそれでもないようである。なにかよくはわからないが、とにかくこれは非常に艶（なま）めかしい所作であることは事実である。私はじっとそれを眺（なが）めていた。遠くの方から夜警のつく棒の音がして来る。その音のほかには町からは何の物音もしない。静かだ。そして私の眼の下では彼らがやはりだんまり

で、しかも実に余念なく組打ちをしている。

彼らは抱き合っている。柔らかく嚙(か)み合っている。前肢でお互いに突張り合いをしている。見ているうちに私はだんだん彼らの所作に惹(ひ)き入れられていた。私は今彼らが嚙み合っている気味の悪い嚙み方や、今彼らが突っ張っている前肢の——それで人の胸を突っ張るときの可愛(かわい)い力やを思い出した。どこまでも指を滑(すべ)り込ませる温(あたた)かい腹の柔毛(にこげ)——今一方の奴(やつ)はそれを揃(そろ)えた後肢で踏んづけているのである。こんなに可愛い、不思議な、艶めかしい猫の有様を私はまだ見たことがなかった。しばらくすると彼らはお互いにきつく

抱き合ったまま少しも動かなくなってしまった。それを見ていると私は息が詰って来るような気がした。と、その途端露路のあちらの端から夜警の杖（つえ）の音が急に露路へ響いて来た。

　私はいつもこの夜警が廻（まわ）って来ると家のなかへはいってしまうことにしていた。夜中おそく物干しへ出ている姿などを私は見られたくなかった。もっとも物干しの一方の方へ寄っていれば見られないで済むのであるが、雨戸が開いている、それを見て大きい声を立てて注意をされたりするとなおのこと不名誉なので、彼がやって来ると匆々（そうそう）家のなかへはいってしまうので

ある。しかし今夜は私は猫がどうするか見届けたい気持でわざと物干しへ身体を突き出していることにきめてしまった。夜警はだんだん近づいて来る。猫は相変わらず抱き合ったまま少しも動こうとしない。この互いに絡(から)み合っている二匹の白猫は私をして肆(ほしいまま)な男女の痴態を幻想させる。それから涯(はて)しのない快楽を私は抽(ひ)き出すことが出来る。……

夜警はだんだん近づいて来た。この夜警は昼は葬儀屋をやっている、なんとも云えない陰気な感じのする男である。私は彼が近づいて来るにつれて、彼がこの猫を見てどんな態度に出るか、興味を起して来た。彼

はやっともうあと二間ほどのところではじめてそれに気がついたらしく、立ち留った。眺めているらしい。彼がそうやって眺めているのを見ていると、どうやら私の深夜の気持にも人と一緒にものを見物しているような感じが起って来た。ところが猫はどうしたのかちっとも動かない。まだ夜警に気がつかないのだろうか。あるいはそうかも知れない。それとも多寡を括ってそのままにしているのだろうか。それはこういう動物の図々しいところでもある。彼らは人が危害を加える気遣いがないと落ち着き払って少しぐらい追ってもなかなか逃げ出さない。それでいて実に抜け目なく観

察していて、人にその気配が兆すと見るやたちまち逃げ足に移る。

　夜警は猫が動かないと見るとまた二足三足近づいた。するとおかしいことには二つの首がくるりと振り向いた。しかし彼らはまだ抱き合っている。私はむしろ夜警の方が面白くなって来た。すると夜警は彼の持っている杖をトンと猫の間近で突いて見せた。と、たちまち猫は二条の放射線となって露路の奥の方へ逃げてしまった。夜警はそれを見送ると、いつものようにつまらなそうに再び杖を鳴らしながら露路を立ち去ってしまった。物干しの上の私には気づかないで。

その二

私は一度河鹿（かじか）をよく見てやろうと思っていた。
河鹿を見ようと思えばまず大胆に河鹿の鳴いている瀬のきわまで進んでゆくことが必要である。これはそろそろ近寄って行っても河鹿の隠れてしまうのは同じだからなるべく神速に行なうのがいいのである。瀬のきわまで行ってしまえば今度は身をひそめてじっとしてしまう。「俺（おれ）は石だぞ。俺は石だぞ。」と念じているような気持で少しも動かないのである。ただ眼だけは

らんらんとさせている。ぼんやりしていれば河鹿は渓（たに）の石と見わけにくい色をしているから何も見えないことになってしまうのである。やっとしばらくすると水の中やら石の蔭から河鹿がそろそろと首を擡（もた）げはじめる。気をつけて見ていると実にいろんなところから――それが皆申し合わせたように同じぐらいずつ――恐る恐る顔を出すのである。すでに私は石である。彼らは等しく恐怖をやり過ごした体で元のところへあがって来る。今度は私の一望の下に、余儀ないところで中断されていた彼らの求愛が encore されるのである。

　こんな風にして真近に河鹿を眺めていると、ときど

き不思議な気持になることがある。芥川龍之介は人間が河童（かっぱ）の世界へ行く小説を書いたが、河鹿の世界というものは案外手近にあるものだ。私は一度私の眼の下にいた一匹の河鹿から忽然（こつぜん）としてそんな世界へはいってしまった。その河鹿は瀬の石と石との間に出来た小さい流れの前へ立って、あの奇怪な顔つきでじっと水の流れるのを見ていたのであるが、その姿が南画の河童とも漁師ともつかぬ点景人物そっくりになって来た、と思う間に彼の前の小さい流れがサーッと広びろとした江に変じてしまった。その瞬間私もまたその天地の孤客たることを感じたのである。

これはただこれだけの話に過ぎない。だが、こんな時こそ私は最も自然な状態で河鹿を眺めていたと云い得るのかもしれない。それより前私は一度こんな経験をしていた。

私は渓へ行って鳴く河鹿を一匹捕まえて来た。桶（おけ）へ入れて観察しようと思ったのである。桶は浴場の桶だった。渓の石を入れて水を湛（たた）え、硝子（ガラス）で蓋（ふた）をして座敷のなかへ持ってはいった。ところが河鹿はどうしても自然な状態になろうとしない。蝿（はえ）を入れても蝿は水の上へ落ちてしまったなり河鹿とは別の生活をしている。私は退屈して湯に出かけた。そして忘れた時分に

なって座敷へ帰って来ると、チャブンという音が桶のなかでした。なるほどと思って早速桶の傍へ行って見ると、やはり先ほどの通り隠れてしまったきりで出て来ない。今度は散歩に出かける。帰って来ると、またチャブンという音がする。あとはやはり同じことである。その晩は、傍へ置いたまま、私は私で読書をはじめた。忘れてしまって身体を動かすとまた跳(と)び込んだ。最も自然な状態で本を読んでいるところを見られてしまったのである。翌日、結局彼は「慌(あわ)てて跳び込む」ということを私に教えただけで、身体へ部屋中の埃(ほこり)をつけて、私が明けてやった障子から渓の水音のする

方へ跳んで行ってしまった。――これ以後私は二度とこの方法を繰り返さなかった。彼らを自然に眺めるにはやはり渓へ行かなくてはならなかったのである。

それはある河鹿のよく鳴く日だった。河鹿の鳴く声は街道までよく聞こえた。私は街道から杉林のなかを通っていつもの瀬のそばへ下りて行った。渓向うの木立のなかでは瑠璃（るり）が美しく囀（さえず）っていた。瑠璃は河鹿と同じくそのころの渓間をいかにも楽しいものに思わせる鳥だった。村人の話ではこの鳥は一つのホラ（山あいの木のたくさん繁（しげ）ったところ）にはただ一羽しかいない。そして他の瑠璃がそのホラへはいって行くと

喧嘩をして追い出してしまうと云う。私は瑠璃の鳴き声を聞くといつもその話を思い出しそれをもっともだと思った。それはいかにも我と我が声の反響を楽しんでいる者の声だった。その声はよく透り、一日中変わってゆく渓あいの日射しのなかでよく響いた。そのころ毎日のように渓間を遊び恍けていた私はよくこんなことを口ずさんだ。

――ニシビラへ行けばニシビラの瑠璃、セコノタキへ来ればセコノタキの瑠璃。――

そして私の下りて来た瀬の近くにも同じような瑠璃が一羽いたのである。私ははたして河鹿の鳴きしきっ

ているのを聞くとさっさと瀬のそばまで歩いて行った。すると彼らの音楽ははたと止まった。しかし私は既定の方針通りにじっと蹲(うずく)まっておればよいのである。しばらくして彼らはまた元通りに鳴き出した。この瀬にはことにたくさんの河鹿がいた。その声は瀬をどよもして響いていた。遠くの方から風の渡るように響いて来る。それは近くの瀬の波頭の間から高まって来て、眼の下の一団で高潮に達しる。その伝播(でんぱ)は微妙で、絶えず湧(わ)き起り絶えず揺れ動く一つのまぼろしを見るようである。科学の教えるところによると、この地球にはじめて声、を持つ生物が産まれたのは石炭紀の

両棲類（りょうせいるい）だということである。だからこれがこの地球に響いた最初の生の合唱だと思うといくらか壮烈な気がしないでもない。実際それは聞く者の心を震わせ、胸をわくわくさせ、ついには涙を催させるような種類の音楽である。

　私の眼の下にはこのとき一匹の雄（おす）がいた。そして彼もやはりその合唱の波のなかに漂いながら、ある間（ま）をおいては彼の喉（のど）を震わせていたのである。私は彼の相手がどこにいるのだろうかと捜して見た。流れを距（へだ）てて一尺ばかり離れた石の蔭（かげ）におとなしく控えている一匹がいる。どうもそれらしい。しばらく見ているうち

に私はそれが雄の鳴くたびに「ゲ・ゲ」と満足気な声で受け答えをするのを発見した。そのうちに雄の声はだんだん冴えて来た。ひたむきに鳴くのが私の胸へも応えるほどになって来た。しばらくすると彼はまた突然に合唱のリズムを紊しはじめた。鳴く間がたんだん迫って来たのである。もちろん雌は「ゲ・ゲ」とうなずいている。しかしこれは声の振わないせいか雄の熱情的なのに比べて少し呑気に見える。しかし今に何事かなくてはならない。私はその時の来るのを待っていた。すると、案の定、雄はその烈しい鳴き方をひたと鳴きやめたと思う間に、するすると石を下りて水を渡

りはじめた。このときその可憐な風情ほど私を感動させたものはなかった。彼が水の上を雌に求め寄ってゆく、それは人間の子供が母親を見つけて甘え泣きに泣きながら駆け寄って行くときと少しも変ったことはない。「ギョ・ギョ・ギョ・ギョ」と鳴きながら泳いで行くのである。こんな一心にも可憐な求愛があるものだろうか。それには私はすっかりあてられてしまったのである。

もちろん彼は幸福に雌の足下へ到り着いた。それから彼らは交尾した。爽やかな清流のなかで。――しかし少なくとも彼らの痴情の美しさは水を渡るときの可

憐さに如（し）かなかった。世にも美しいものを見た気持で、しばらく私は瀬を揺がす河鹿の声のなかに没していた。

底本：「日本文学全集別巻1現代名作集」河出書房
1969（昭和44）年5月30日初版発行
入力：kaku
校正：浜野　智
1998年8月28日公開
2003年9月7日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです